

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 1 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510306

研究課題名(和文) ミャンマーにおける仏教布教の政治・社会的展開：同化政策・市民活動

研究課題名(英文) The Politics and the Social Expansion of Buddhist Missionary works in Myanmar

研究代表者

土佐 桂子 (TOSA, Keiko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90283853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：ミャンマーにおいて上座仏教は政権の正統性原理でもあり、国民意識の核でもある。1991年宗教省の下に仏教発展普及局を設置し、サンガ組織も国家仏教学大学の学僧を辺境地へ派遣する制度を作り、国家的に布教事業が推進された。こうした仏教布教の調査を通じて、辺境地域での仏教布教が地域によってきわめて多様に展開していることを明らかにした。全国規模で最も成功した活動は僧院附属学校(バカチャウン)であるが、この活動は必ずしも改宗を目的とせず福祉的役割を持つ。これらの活動を通じて、僧侶や在家信者が異なる宗教の人々と出会い、自らの宗教概念、実践を再帰的にとらえなおすプロセスを経る点にも特徴がある。

研究成果の概要(英文)：In 1991, the military government established the Department of the Promotion and Propagation of Sasana and tried to promote the Buddhism in the mountainous area. The Sangha Organization also decided to dispatch student monks at State Pariyatti Sasana Universities to the missionary monasteries as part of Buddhism education. One of the most successful projects seems to be voluntary schools (Ba-ka-kyung), based on the monasteries. My research has explored how the Buddhist missionary works have been involved in both arenas of the national politics and of the local communities and also to consider how the monks and the lay people evaluate their own practice, the concept of religion or their own faith reflexively.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：布教 同化政策 市民運動 上座仏教 宗教人類学

1. 研究開始当初の背景

研究上の背景として3つの流れの先行研究がある。

第一に、布教・伝道(ミッション)研究で、これまでキリスト教を核とし、植民地主義との関係を含めて行われてきた。キリスト教の伝道(ミッション)とは、異教徒である他者を啓蒙し、改宗しようとする活動であり、欧米の動きであったことから近代化、文明化という概念とも結びつき、植民地支配との深いかわりにおいては批判にさらされてきたが、同時に、教育、出版、福祉といった側面で当該社会に寄与したり、他者との出会いを通じて当該社会の民族的、近代的自覚を促すという側面もあった。それに対して仏教の布教は、スリランカ、ミャンマーなど植民地下でキリスト教布教への反応として生じた側面もある。しかし、キリスト教、あるいはイスラームの布教と比較し、近代における仏教布教は国家を超えて広域に行われることは少ない。またキリスト教布教研究に比して、仏教布教研究は極めて限られてきた。ミャンマーにおいても、布教活動が仏塔建築という形で布教が展開し、先行研究はその側面に特化したものであった。これをより広い文脈から政策を含めて仏教布教をとらえる必要から生じたものである。

第二に、宗教研究における出家・在家関係はコミュニティ内の民族誌では緻密に描かれてきた。ただし、従来の人類学的方法論として村落を核として調査を行い、出家・在家の関係はマイクロレベルで精緻に分析されたものの、村落を越えた僧侶の広範囲の活動やネットワークが十分に研究されたとは言いがたい。それに対して、本研究は、政府主導と在野の活動という二種の仏教布教活動を追い、さらに国際NGOや海外の僧院とのつながりを視野に収め、出家者を核とした広いネットワーク形成に着目することとなった。

第三に、近年の僧侶による社会活動には、「社会参加仏教」と「市民運動」という観点から注目された。上座仏教研究において出家は在家や在家の活動と一線を画し、来世的活動に従事することが望ましいとされてきたが、こうした「伝統」的仏教理解の枠組みを超え、僧侶が意識的に世俗社会に関わり、社会参加する活動が注目されたといえる。ただし、上記の観点は、いわば改革運動として、一部の思想的僧侶の活動が紹介され、上座仏教社会全体における位置づけが弱かったといえる。

一方、ミャンマーの場合、2008年5月大被害をもたらしたサイクロン・ナルギスの救援に僧侶を核としたネットワークが有効に働き、国際NGOと連携したことは国際社会からも注目を浴びた。これは、社会参加仏教的側面といえるだろう。ただし、現地社会ではこれが「仏教布教」活動という枠組みで理解されてきたことは多くの場合看過されている。国際社会において「福祉」「市民活動」と理

解される運動が、現地の「仏教布教」という枠組みのなかで多大な動員力を有していることに着目する点に本研究計画の大きな特色があるといえる。

2. 研究の目的

ミャンマーでは、歴史的に仏教布教は行われてきたが、特に前軍事政権下で宗教省の下に仏教発展普及局が設けられ、その傘下にある国内仏教布教課が辺境地の少数民族の仏教布教を推進している。宗教を問わず、「布教」の究極的目的は異教徒の改宗といえるが、本研究では、この内実を明らかにすることを目的とした。その際に、政府の政策として行われる「仏教布教」と一般社会における「仏教布教」活動の双方に着目する。さらに、仏教布教をとらえる際に、宗教という枠組みに留まらず、主要民族への同化政策と、福祉を目的とした市民活動という二つの方向性から再考することを目的とする。

3. 研究の方法

研究の方法として計画当初から政策面と地方での仏教布教という二つの側面から調査することを掲げてきた。一方、科研申請時にはミャンマーは軍事政権下にあったが、本研究テーマの採択時(2011年4月)に、時を同じくして大統領制に移行し、この政府は当初考えられた以上に民主化への舵取りを行い、社会的にも変化を迎える時期となった。こうした状況を踏まえて、申請時の計画に適宜変更を加えながら研究方法を模索した。

初年度、政治情勢が目まぐるしく変化するなか、宗教省にアクセスしてみたところ、幸い許可が取れた。この宗教省の許可により、地方調査の許可、省庁の協力が得られ、その点では大きな進展があった。この回路を通じて、役所側の報告書等を収集した。また、計画作成時には予想していなかったが、2011年以降現政権下で仏教徒とムスリムとの宗教対立が生じ、これが大きな社会的課題となった。研究はこの状況に対応せざるをえず、僧侶による反ムスリム運動、仏教保護運動や社会運動等も追うことになった。一方、許可の有効な間に、可能な限り地方調査を行う必要性を感じ、最終年度まで調査を行うこととした。具体的には以下の形で調査を行った。

(1) 宗教政策とサンガの動き：仏教布教活動に関わる基礎的文献資料の収集(ヤンゴン、マンダレー)、サンガ長老会議報告書の収集に加えて、初年度より赴いた地域での宗教省関連の統計資料、宗教施設関連の資料、各地区サンガ長老等とのインタビューを通じて、地域における宗教状況の把握に努めた。

(2) 仏教布教の展開：仏教布教の実践を理解するため、現地調査を行った。

仏教布教思想とその系譜

仏教布教の思想、実践等の系譜をミャンマー国内で一定程度把握する必要がある。少な

くとも、国家仏教学大学で基礎的に教えられる「布教史」や「布教思想」を理解する。

仏教布教の実践の多様性

2011年8月宗教省交渉に基づき計6回10か所の調査を行った。そのうち3か所(ネーピードー、マンダレー、ヤンゴン)については、大都市であり、研究対象を絞る形で調査を行い、それ以外の布教拠点では、外国人の許可が出る範囲内で現地調査を行うようにした。

- ・2011年9月首都ネーピードーにて宗教省幹部との会合(宗教省中枢、さらに仏教普及発展局局長との会合、簡単なインタビュー調査)その後マンダレー市、ヤンゴン市調査
- ・2012年3月ザガイン管区カレー市(チン村落など)、シャン州チャイントン市キリスト教徒も多いが、アカ、ラフなどを中心に一部で進む仏教布教活動を調査した。
- ・2012年9月シャン州ラシヨ市周辺キリスト教徒なども多いなか、ラシヨ市近辺の仏教布教僧院を中心に、学校併設、孤児院創設の事例調査。
- ・2013年3月カヤー州ロイコー周辺:これまで入りにくかったカヤー州調査で、キリスト教、精霊信仰などを信仰するカヤン(パダウン)族、パオ族の村に入って活動中の仏教布教僧侶の調査。

シャン州タウンジー周辺:今回は時間が限られていたため、パオやシャンの布教僧院などの調査。

- ・2013年9月カレン州ミャワディ郡からフラインボエ郡パアン郡:カレン民族のキリスト教徒などのあいだで行われる布教の調査。
- ・2014年2月チン州ハカ郡からファラン郡ティデーイン(ティデーム)郡などの仏教布教活動の調査。

4. 研究成果

(1) 宗教政策とサンガの動き

上述の宗教対立が日本国内で報道されるにつれ、宗教政策やサンガの動き、宗教対立の背景や原因といった解明、あるいは民主化の動きにおける宗教の役割等を明らかにすることに対して社会的要請が生じた。こうした状況を踏まえ、国内のみならず海外の講演、論文発表を通じて、宗教政策とサンガに関する成果を発表した(例えば論文、発表、図書など)。

(2) 仏教布教の展開

仏教布教思想と系譜

仏教布教の思想、実践等は、国家仏教学大学の教育における歴史や思想、さらに1990年代以降の著名僧侶の仏教布教実践とも関連している。この点については以下の形で成果発表を行った(論文、発表、図書など)。

仏教布教の実践の多様性

上述の通り10か所での調査を通じて、仏教布教拠点の状況が極めて多様であること

が明らかになった。サンガ教育政策上、仏教布教拠点に、多くの国家仏教学大学(ヤンゴン、マンダレー)から学位(学士、修士)の課程として派遣される僧侶が多いが、それ以外の僧侶の参加も少なくない。一方、今回の調査は、あくまでビルマ・サンガの側から見た布教活動を中心に見てきたが、地域により活動内容はかなり異なるといえる。地域の背景により、たとえば、シャン州の布教とチン州のそれとは大きく異なる。さらに、チン族が多い地域の活動のなかでも山地と平地における布教はかなり異なるといえる。布教僧により、主な目的は布教(改宗)を焦点とするものと地域への還元を目的とするもの(教育、福祉)が存在する。個人が双方を目的とする場合もあるが、どちらを最終目標とするかにより、戦略的に使い分けることも多々みられる。また、仏教布教僧として派遣される若手僧侶は従来の環境から切り離され、他者との出会いのなかで、教義、戒律、修行、さらには信仰、宗教に関わる実践と信念を自省的に問い直すことが多い。改宗した少数民族たちも、政治的な利害関係から改宗したが、徐々に仏教実践が身体化されるプロセスなどを語ることもある。他方では、布教の思想そのものが現在生じ始めているミャンマーの大きな問題(宗教対立)と深く関わり、社会運動化していく側面も見られる。こうした研究については、未だごく一部しか発表していない(発表、図書など)。今後、データをまとめ、より理論的にとらえたうえで、成果発表を続ける予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

TOSA, Keiko "The Sangha and Political Acts: Secularization in a Theravada Buddhist Society" *Internationales Asian Forum* 44(3-4):105-131, 2013. (査読有)

土佐桂子「ジェンダーの視点から見たミャンマーの民主化プロセス」『ジェンダー史学』第9号:23-38, 2013. (査読有)

TOSA, Keiko "From Bricks to Pagoda: Weikza and the Rituals of Pagoda-Building", *Journal of Burma Studies* 16(2):309-40, 2012. (査読有)

[学会発表](計7件)

TOSA, Keiko "Religious Sanctuary and Tactics of Migrant Families in Myanmar", 6 March, 2014, Joint Lecture of UMS and TUFs at University of Malaya, Saba, Kota Kinabaru, Malaysia, 2014(依頼講演)

TOSA, Keiko "Thathanapyu project and Survival Tactics of Migrant Families", Japan-Myanmar Joint Seminar on Social Anthropology, 21-22, February, 2014

Myanmar-Korea Local Knowledge Center,
Bwenyinthabin Road, Yangon University,
Yangon, Myanmar.

土佐桂子「ミャンマーにおける社会変化と宗教に見られる新たな動き」『現代ミャンマーにおける政治と宗教のダイナミクス』2014年1月25日於：東洋大学アジア文化研究所シンポジウム（依頼講演）

土佐桂子「最近の宗教関連の動向：ティンセイン以降」アジア経済研究所ミャンマー・ポスト軍政研究会，2013年12月16日

土佐桂子「ミャンマーにおける無形文化遺産項目収集の現状と課題：伝統手工芸の観点から」『無形文化遺産シンポジウム「アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題」』、アジア太平洋無形文化遺産研究センター・堺市、2013年2月17日（招待講演）

土佐桂子「ミャンマーの民主化プロセスとジェンダー：軍隊・僧侶・アウンサンスーチー」ジェンダー史学会、シンポジウム於東京外国語大学(依頼講演) 2012/12/8

TOSA, Keiko “Researching History, Culture and Religion in Southeast Asia: Politics and Religion in Myanmar” (Japan and Southeast Asia: Varieties of an intra-regional relationship) at the annual conference of German Association for Social Science Research on Japan, November 23-25, 2012 in Weingarten, Germany (招待講演)

〔図書〕(計4件)

TOSA, Keiko “From Bricks to Pagodas: Weikza Specialists and the Rituals of Pagoda-Buildings”, in *Champions of Buddhism: Weikza Cults in Contemporary Burma*, Bénédicte Brac de la Perrière, Guillaume Rozenberg and Alicia Turner eds. (Singapore: National University of Singapore Press) forthcoming pp.114-140.

土佐桂子「人々にとっての仏教：新しいインターフェイスの展開」『ミャンマーを知るための60章』（田村克己・松田正彦編）明石書店,193-97頁，2013.

土佐桂子「ミャンマー軍政下の宗教-サンガ政策と新しい仏教の動き」『ミャンマー政治の実像-軍政23年の功罪と新政権のゆくえ』（工藤年博編）アジア経済研究所，pp. 201-233, 2012.

TOSA, Keiko “Survival Tactics of Migrant Families in a Religious Area in Myanmar”, In eds by Hayami, Yoko, Junko Koizumi, Chalidaporn Songsampanratana Tosakul, *The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology, Practice*. Kyoto and Bangkok: Kyoto university & Silkworm books, pp. 439-462, 2012.

(1)研究代表者

土佐桂子 (TOSA, Keiko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90283853